

パネルディスカッション

医学情報をめぐる図書館コラボレーションの可能性

コーディネーター：和田ちひろ 氏

(いいなステーション <http://www.e7station.com/index.html> 代表)



1972 年生まれ。95 年慶応大学文学部卒。98 年同大学院政策メディア研究科修士課程修了。1998 年より杏林大学保健学部助手（02 年 3 月退職）。98 年に HCRM 研究会（ヘルスケアリレーションシップ・マーケティング）を設立、現在代表幹事。99 年より 3 年間、「こんな病院あったらいいな」（ナースingtトゥデイ・日本看護協会出版会）を連載。2002 年より 1 年間、(株)ケアネットにて「患者さんに選ばれるクリニック・そこが知りたい増患定着 12 のコツ」番組パーソナリティ兼プロデューサーを務める。03 年 3 月から「いいなステーション」代表。04 年 7 月から東京大学の医療政策コースプログラムにおいて特任助手を兼任。

【主な著書】

- 「みんなのこんな病院あったらいいなが実現する本」（共著・日総研出版/01 年 8 月）
- 「ナースがつくる患者に選ばれる病院」（単著・日本看護協会出版会/03 年）
- 「患者からみた医療」（分担執筆・放送大学/03 年）
- 「全国『患者会』ガイド 最新版 患者と家族の知りたい情報がすぐに調べられる」（監修・学研/04 年）

【主な連載】

- 「こんな病院あったらいいな」（ナースingtトゥデイ／日本看護協会出版会）
- 「患者さんに喜ばれる体制づくりを目指して」（UCB ニュース）
- 「ちひろの病院見聞録」（医療経営情報／エルゼビア・ジャパン）

～いいなステーション HP から転載～

【主な図書館関連の文献】

- 患者アドボカシーと病院図書室：その役割と連携の可能性．病院図書館 2003;23(4):166-170
- 患者会情報の特徴（特集 カラダと病気の情報を探す）．みんなの図書館 2003;通号 31726～28
- 「みんな満足」の病院をつくるためのヒント 花開きつつある「患者図書室」．ナースマネジャー 2002;4(2):58-59.

【連絡先】 〒359-0037 埼玉県所沢市くすのき台 3-13-1-102

FAX：020-4624-9285 メールアドレス：info@e7station.com

発表抄録は当日資料として配付されます。

公共図書館の立場から

浦部幹資
愛知県図書館

1 公共図書館の医療情報提供

昨年、今年はこの大会を含め、ここ数年公共図書館の医療・健康情報提供（日本図書館協会の「健康情報研究委員会」の活動、東京都立中央図書館や浦安市立図書館の取組など）について活発な報告がなされている。

こうした取組は、公共図書館がレファレンス・読書案内にサービスの重点をシフトしつつあることも一つの要因ではあるが、何よりも、医療に対する市民の考え方、接し方の変化、そして高齢化によって、医療・健康情報を求める市民が増えてきたことによるものであろう。

したがって、意識的な取組は一部の図書館に限られているが、そうでない図書館の現場でも、高まる利用者の要求に応える形で医療・健康に関する資料提供が活発になってきていることと思われる。

とはいえ、多くの公共図書館は、正規職員の削減、カウンター業務の外注化、資料費の削減等により極めて厳しい状況にあり、人的にも物的にも負担の大きい医療・健康情報の提供という新たな領域に足を踏み入れるのを躊躇している。

規模の大小に拘わらず、市民に身近な図書館ほど医療・健康情報提供の重要性が今後もましてくる。小さな市町村の図書館が医療・健康情報の提供を行うとしても、自館だけでできることは多くない。しかし、地域の保健所や病院、そして図書館ネットワークの力に頼ること、それを前提に、コレクションやサービスを考えれば、一步を踏み出すことができるのではないだろうか。

2 公共図書館と医学図書館の協働

医学図書館の一般開放も近年すすんでいる。自戒をこめていうなら、公共図書館側はそれを良いことに、医療情報を求める市民を安易に医学図書館に送りこんでいないだろうか。そうした公共図書館の姿勢は、医学図書館を公共図書館不信に陥らせ、協働とは反対の方向に進みかねない。

公共図書館は市民の身近で気軽な窓口として、医療・健康情報を求める人々をまず受けとめ、資料・情報を提供する努力をしよう。とはいえ、県立図書館レベルも含め公共図書館が収集している医療情報は、今のところあまりに貧弱である。また、相当程度努力をしても、高度な医療情報を求める市民までも満足させるものにはならないだろう。その先の医療情報の提供は、医学図書館に恃むことになる。

公共図書館は医療情報を求める市民を、医学図書館の利用を含め、的確に道案内する役割を果たせるようになることが必要である。そのためには、医療関係資料について学び、医学図書館の状況を知り、県立レベルの図書館ではできることなら医療文献データベースを導入し使いこなせるようになりたい。そうなれば、医学図書館への一方的な依存ではなく、一般市民への医療情報提供のための医学図書館との協働が可能となるだろう。

東海地区医学系図書館の事例

坪内政義

愛知医科大学医学情報センター（図書館）

一般への医学情報提供、図書館公開、医療現場のサポートといった新しい課題を前にして図書館間の連携は有効に実現されているだろうか。医学情報をめぐる変化に対する図書館サイドの反応は鈍いように感じる。もしそうだとすれば、それは個人の意識の問題でもあるし、組織の問題でもある。

新しい情報流通の動きは、サービス大会参加者それぞれの現場にさまざまな影響を与えているに違いない。現状を振り返り、業務レベルの向上と組織的な対応を図るために何が必要なのか、次のような観点から考えてみる。

1. 図書館間の連携の現状：東海地区医学図書館協議会の活動例

①研修事業

- ・協議会（加盟館は大学の医学図書館が主）が企画し、病院図書室や関連分野の図書館に参加を呼びかけている

②大学、研究所、病院を合体した総合雑誌目録「東海目録 Web 版」の作成

- ・相互貸借のツールとして
- ・地区協力体制のシンボルとして
- ・病院⇒大学、だけでなく、病院⇔病院、大学⇒病院、の実績を作る。愛知医大の統計では、**2003年度は323件（全体の6%）、2004年度は193件（全体の4%）。**

③薬学、看護学など、他機関との連携

④組織のあり方から見た活動

●大学図書館が担うべき役割●

- ・病院は卒後研修を担っている。（卒業生を育て鍛えてもらうのだから）大学図書館は病院図書館に最大限の協力をしなくてはならない。
- ・自分の大学を卒業した医師、看護師が恥ずかしくない医療や研究ができるよう、大学図書館は医学情報教育や利用指導に責任を持たなくてはならない。
- ・大学図書館が行う教育や指導の基準作り（全国版あるいは地区版）の可能性。
- ・それぞれの役割を理解して協力し合うことが大学と病院の図書館には必要。

2. 患者・市民の情報ニーズへの対応：東海地区の場合、愛知医科大学の現状

- ①積極的な働きかけはしていない。図書館利用には医師など専門家の紹介が必要
- ②大学図書館の開放か、患者図書室の設置か
- ③議論を起こすために→必要とされていないのか→必要と認識しないのか
- ④大学と附属病院の連携の問題

3. 情報提供者としての図書館員の役割：専門性の確認

看護大学図書館の公共図書館連携への試み

中 尾 明 子

日本赤十字豊田看護大学図書館

日本赤十字豊田看護大学は平成16年4月に名古屋市の日本赤十字愛知短期大学より移転開学した。学外者への図書館利用は大学等学校関係者、医療保健関係者に限られており、現時点では一般市民の利用は原則的にはできないことになっている。大学管理上の問題と折り合いを付けて、今後どのように地域に貢献するかが課題である。

河合らの調査¹⁾によると市民が医療情報を入手する図書館として「患者のための情報センター」が69.1%、続いて「病院の患者図書室」「公共図書館の医学情報充実」であり「大学医学部図書館の利用可能」は4.2%の最下位である。また、早野²⁾が紹介する海外EBM事情によれば「患者や家族が独自にエビデンスに基づいた情報をインターネットなどで積極的に得ようとするのは、生命が脅かされているような疾患と出産のケアに関してのみ」であるとすれば、単に市民開放の図書館では真の意味で地域貢献とは言えないのではないだろうか。

さて、大学が在る豊田市は財政も豊かで平均年齢は38.51歳³⁾の若い都市である。豊かな財政を反映して豊田市中心図書館の資料費は1億3千万円、一般図書費のみでも8千万円である。市民の利用も高く、人口1人あたりの貸出冊数は9.1冊、昨年度は約170万冊の貸出実績がある。医学系図書は約22,500冊所蔵している。健康情報関連図書が多いものの「看護のための最新医学講座」等、医学専門書も所蔵している、医学関連図書（開架）の貸出率は30.8%であり、平均貸出率21.2%を大きく上回っている。

市民の医学情報ニーズに当館が応えることができるのだろうか、探ってみることにした。

1. 両館のOPAC検索からみえてくるもの
2. 当館の蔵書の特色を活かすもの 「闘病記」^{4) 5) 6) 7)}

(引用参考文献)

- 1) 河合富士美、江口愛子ほか 一般市民の医学・医療情報需要調査. 医学図書館 2002 ; 29(4) : 376-382
- 2) 早野真佐子 エビデンスに基づいた情報は患者に届いているのか. EBMジャーナル 2003 ; 4(5) 587-590
- 3) 豊田市(総)庶務課 新豊田市の人口. 速報とうけいとよた 2005 ; No.531
- 4) 門林道子 現代における「闘病記」の意義. 看護教育 2004 ; 45(5) 358-364
- 5) 門林道子 闘病記をめぐるコミュニティの形成. 日本女子大学大学院人間社会研究科 紀要 2001 ; 7 123-137
- 6) 星野史雄 古書「パラメディカ」店主が語る“闘病記”との出会い. 看護教育 2004 ; 45(5) 350-355
- 7) パラメディカ [internet] <http://homepage3.nifty.com/paramedica/> [accessed 2005-6-10]

病院図書室からの医学情報の提供

—医学情報の一般公開から—

山室眞知子
京都南病院図書室

病院図書室の多くは所蔵資料が少なく、医師をはじめ医療スタッフの臨床や研究、学会発表に必要な医学文献を十分に自館に所蔵する資料でまかなうことは不可能である。不足の資料はまず病院図書室間での相互協力と、大学医学図書館への一方的な協力要請を依頼しなければならない。このように病院図書室は他館へは協力要請が主であるが、病院図書室からの提供は地域の開業医のほかはごく稀に公共図書館から看護関係の文献依頼を受ける程度であった。

当図書室では比較的早期から NACSIS へ所蔵データの提出を行っている関係で、当院が加盟している近畿病院図書室協議会加盟以外の病院図書室と大学医学図書館から文献依頼を受けることは再々あるが、その図書館の館種は病院、医学図書館、看護図書室の範囲に限定されていた。

しかし、1997 年から当院図書室の一般公開を開始して以来、医学部を併設しない大学図書館、公共図書館、企業図書館から医学文献複写依頼をはじめ、各図書館を通じて利用者の資料閲覧、医中誌 Web の利用の依頼件数が増加してきた。特に多いのは文科系大学図書館から心理学専攻の学生と院生の資料閲覧依頼で臨床心理学関係の資料が利用されている。各図書館で NACSIS Cat による文献検索で当院での資料の所在を確認してもらっての利用が多い。

一般利用者の利用は当院ホームページで医学情報の公開を知っての利用者であるが、なかにはホームドクターから文献を紹介されて閲覧に来られることもあった。

院内利用者への資料提供は他病院図書室、大学医学図書館の協力を得なければできないが、所蔵資料のデータと図書室を広く公開することによって、当院のような小規模の病院図書室でも図書館コラボレーション活動に参加できるということである。病院図書室は資料が乏しいというものの、医学関係以外の図書館利用者にとっては「医学情報の宝庫」と評されている。このことから各種図書館の利用者に役立つと考える。